

流るる光途

(大正七年桜星会歌)

一

流るる、光途重ね来て
星霜此處に四十年
北斗の光眸さす所
櫻かざして先人の
樹立し歴史を偲ぶ時
誰か血汐の湧かざらむ

二

咽ぶ悲憤の誓より
早や七年の春うつり
人は変遷れど三百の
健兒不滅の意氣を持す
いでや謳はん北州の
精力に満ちし凱歌を

三

陽春の光に覆翼まれ
嫩草萌ゆる北の郷
手稲の麓健兒等が
燃ゆる想を合唱せば
牧場の彼方際涯しらず
高鳴たて、響きゆく

四

豊平川の夏の夜や
玉兎の踊る波の上
自治の流の悠久を
語る川邊に佇めば
ありし往昔を追憶へとや
古塔に響く時の音

五

こ、石狩の大沃野
静けき秋のめぐり来て
天紺青の色ふかく
地は豊穰なる平和境
人は有情の美しき
自然の愛に狎る、哉

六

萬里茫々雪の海
白龍怒り風叫ぶ
吹雪にさめし 暁や
迷の雲をおしひらき
常世の幸を恵むなる
お、紅の朝日影

七

北辰冴ゆる夕まぐれ
ボーイズビー
アンビシアスの
崇高き教を胸に秘め
エルムの梢とことはの
自由の調聴くところ
若き生命を誇らばや